

丹後の横穴墓

肥後弘幸

2026年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

丹後の横穴墓

肥後弘幸

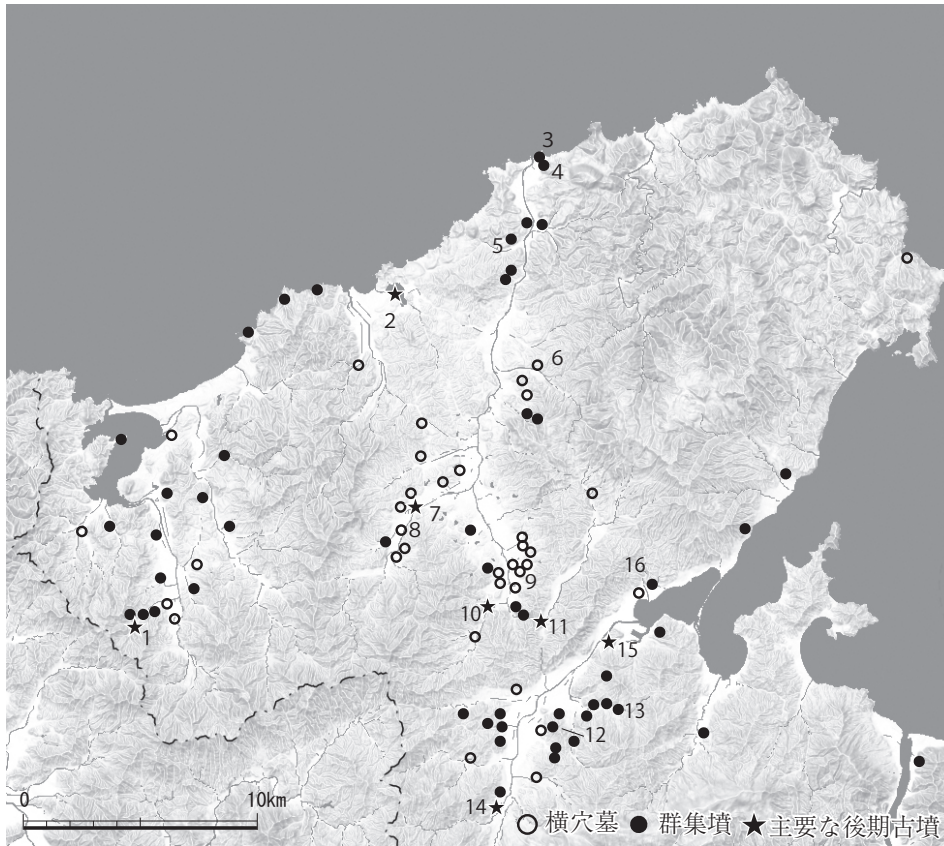
1. はじめに

丹後地域(本論では丹後国5郡のうち加佐郡を除く現在の京丹後市と与謝郡を指す)における横穴墓よこあなぼの存在は古くから知られていた。京丹後市峰山町下山横穴は、1898(明治31)年に発見され、1899年6月刊行の人類学雑誌に松本庄三郎氏により、台付長頸壺と甕の略図(注1)とともに報告されている。全国的に高等学校の歴史クラブによる発掘調査が盛んだった1950(昭和25)年には、府立峰山高等学校坪倉利正教諭を顧問とする同校郷土史研究会により京丹後市峰山町の舟泉寺横穴の調査を実施している。

行政機関による本格的な発掘調査が実施されたのは、1980(昭和55)年の峰山町教育委員会による下山横穴の発掘調査である。同調査の報告書には、丹後半島には、京丹後市久美浜町に4か所、同網野町に1か所、同弥栄町に2か所、同峰山町に8か所、同大宮町に2か所、与謝郡伊根町に1か所、同野田川町に1か所の19の横穴墓が存在すると記されている(注2)。

1985・1986年度に実施された大田鼻横穴の調査では、30基の横穴墓が検出され、7世紀初頭から8世紀に続く横穴墓の実態が明らかになった(注3)。その後、京丹後市大宮町内での発掘調査で多くの横穴墓の存在が明らかになり、現在、丹後半島には36か所(京丹後市29か所、与謝郡伊根町1か所、同与謝野町6か所)167基以上の横穴墓が知られている(図1・表1)。

丹後の横穴墓の研究は、大田鼻横穴の調査を契機にすすむ。岡田晃治氏は、1989年に「大田鼻横穴群の再検討」で大田鼻横穴と但馬の横穴との類似性を指摘した(注4)。森正氏は1996年に「丹後地域横穴墓の変質と終焉」で、大田鼻横穴の周辺で相次いで調査された横穴墓の調査成果をもとに、横穴墓の変遷を的確にまとめた上で、8世紀前半まで造墓活動が続く特異性に注目し、律令国家の地方支配が末端の地方社会まで及んでいなかったことを傍証するとした(注5)。岡林峰夫氏は、1998年の第16回両丹考古学研究会・但馬考古学研究会「7世紀の諸問題」の中で、その後発見されたエノボ横穴・裾谷横穴の成果を含めて丹後の横穴墓をまとめている(注6)。2004年には渡邊邦雄氏が大和、山城、丹後の横穴墓を副葬された土



1 湯舟坂2号墳、2 離湖古墳、3 大成古墳群、4 片山古墳群、5 高山古墳群、6 城ノ越横穴
 7 桃谷1号墳、8 下山横穴、9 大田鼻横穴、10 新戸古墳 11 西外1号墳、12 入谷古墳群、
 13 高浪古墳群、14 滝岡田古墳、15 霧ヶ鼻古墳群、16 解谷古墳群

図1 丹後地域の横穴墓と後期古墳の分布(国土地理院地図に加筆)

器組成から比較し、丹後の横穴墓の意義を墓前祭祀という観点から論じている^(注7)。2018年には、中村彰伸氏が「丹後における横穴墓の立地とその階層性」と題して、丹後の横穴墓を詳細に検討した上で、南山城の横穴墓と比較し、丹後の横穴墓は石室墳の下位に位置しており、在地首長のもと横穴墓が地域で展開した。7世紀後半以降は石室墳を築造していた集団が造墓規制により横穴墓に墓制を転換したとした^(注8)。

2. 横穴墓の分布

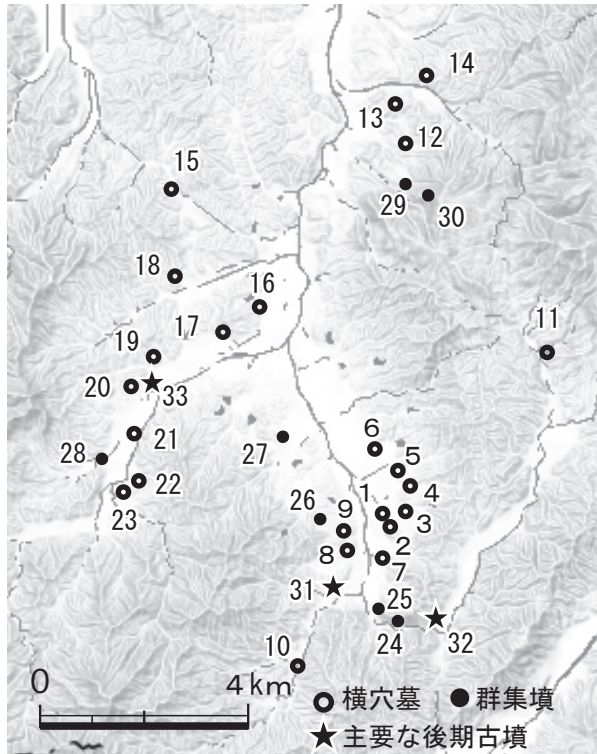
丹後地域は、弥生時代後期以降、造墓活動が著しい地域である。現在府内には、約18,100か所の埋蔵文化財包蔵地が存在するが、その内丹後半島には約8,300か所の埋蔵文化財包蔵地が存在する。このうちの9割近くが、弥生時代の墳墓と古墳であるが、横穴式石

表1 丹後の横穴墓地名表

	名称	所在地	基数	現状、規模、出土遺物	築造時期
1	長柄横穴	京丹後市久美浜町長柄	7	全壊	
2	王の宮横穴	京丹後市久美浜町須田	11	8基完存、3基半壊	
3	下西谷横穴	京丹後市久美浜町金谷	1	ほかに1基埋没か	
4	白川横穴墓	京丹後市久美浜町奥三谷	4	4基とも両袖型、1号長3.7m・幅3.1m・高1.2m、2号長2.9m・幅4.1m・高2m、3号長2.2・幅2.2m・高1.5、4号長3.2m・幅2.5・高1.5m	
5	谷横穴	京丹後市久美浜町谷	1	4m×2m余り、一時農用穴倉と認識	
6	三反田横穴	京丹後市網野町下岡	10	10数基からなる。土師器（中世か）2点	
7	飛谷横穴	京丹後市弥栄町堤	2		
8	住地横穴	京丹後市弥栄町溝谷	1	須恵器杯、高杯、甗、長頸壺	
9	城ノ越横穴	京丹後市弥栄町堤	1	須恵器杯身、杯蓋、杯（墨書）、平瓶、壺	7世紀中頃～末
10	高尾坂横穴	京丹後市峰山町橋木	1	完存	
11	八幡山横穴	京丹後市峰山町杉谷	1	全壊。須恵器杯身、杯蓋、高杯、甗	7世紀初頭
12	舟泉市横穴	京丹後市峰山町菅	3	消滅。昭和25年調査。1号墓全長3.8m・幅1.7m・高さ1.55m、2号墓全長3.7m・幅2.35m・高さ2.15m。金環、須恵器杯、高杯、横瓶、壺、土師器。	
13	丸山横穴	京丹後寺峰山町古殿	1	全壊。金環、鉄刀、須恵器杯身・杯蓋・高杯・高杯蓋・甗	
14	目谷横穴	京丹後市峰山町新治	8	全壊	
15	舟山横穴	京丹後市峰山町二箇	1	消滅。須恵器	
16	下山横穴	京丹後寺峰山町五箇	11	消滅。鉄刀、刀子、鉄鏃、金環、須恵器杯身、椀、甗、台付壺	7世紀初頭～7世紀中葉
17	脇谷横穴	京丹後市峰山町五箇	2	全壊	
18	筏ヶ鼻横穴	京丹後市峰山町五箇	5	全壊。鉄刀、須恵器多数。	
19	猫山横穴	京丹後市大宮町三坂	多数	消滅 須恵器杯、壺、広口壺、土師器壺	
20	有明横穴	京丹後市大宮町三坂	9	消滅 8基調査 勾玉（翡翠、瑪瑙）、水晶切子玉、丸玉、鉄鏃、刀子、須恵器多数、土師器多数、ふいご刃口、移動式竈	7世紀前葉半～8世紀前葉
21	大田鼻横穴	京丹後市大宮町三坂	30	消滅 1～30号横穴調査 鉄刀、刀子、鉄鏃、金環、鉄鏃、須恵器多数、土師器多数、墨書土器	7世紀初頭～8世紀中頃
22	左坂横穴	京丹後市大宮町周枳	21	4基現存、17基調査、短剣、鉄鏃、刀子、金環、須恵器多数、土師器多数	7世紀中頃～8世紀前葉
23	里ヶ谷横穴	京丹後市大宮町周枳	6	消滅 6基調査 刀子、鉄鏃、金環、須恵器、土師器	7世紀初頭～7世紀末
24	カンジヨガキ遺跡	京丹後市大宮町周枳	5	5基調査。土師器、須恵器	7世紀前葉～8世紀前葉
25	裾谷横穴	京丹後寺大宮町口大野	2	消滅。2基調査	8世紀前葉
26	エノボ横穴	京丹後寺大宮町口大野	2	消滅。2基調査	7世紀
27	大谷西横穴	京丹後寺大宮町三坂	5	4基は消滅か	
28	丸山横穴	京丹後寺大宮町常吉	1	前面にテラスあり。須恵器	
29	彦四郎横穴	京丹後寺大宮町久住	1	全壊。須恵器杯蓋、甗、土師器甗	7世紀初頭～中葉
30	小泊横穴	伊根町泊	1	海蝕洞窟（長さ10m・幅5m）を横穴墓として利用か。組合せ式木棺、人骨、須恵器杯・平瓶	
31	城山横穴	与謝野町岩滝	1	消滅。土師器	
32	古屋敷横穴	与謝野町三河内	2	1号横穴は調査の結果中近世の貯蔵穴と判明、2・3号横穴は完存。	
33	庄内横穴	与謝野町岩屋	1	完存、長さ2.8m	
34	有熊横穴	与謝野町加悦奥	6	完存する2号横穴全長3.5m・幅1.8m、他は半壊。	
35	入谷横穴	与謝野町明石	2	半壊。人骨	
36	こもり穴横穴	与謝野町温江	1	半壊。土師器	

室をもつ古墳は530基ほどしかない。丹後地域は、弥生時代後期から小規模な墳墓の造墓活動が活発でいわゆる5世紀末から造墓がはじまる須恵器を副葬する初期群集墳までは多数の墳墓が営まれる。一方、6世紀後半以降の後期群集墳は少なく、群集墳に横穴式石室をもつ単独墳および2基からなる古墳群、並びに7世紀に盛期を迎える横穴墓を加えても、6世紀以降の墳墓の総数は700基ほどである。

図1は、概ね3基以上の横穴式石室から構成される古墳群を群集墳として、横穴墓とともにその分布を表示したものである。6世紀後半から7世紀にかけての首長墳と言える馬具や鏡の出土が知られる新戸1号墳、西外1号墳、桃谷1号墳が単独墳として存在する。一方、群集墳は丹後地域全域では、久美浜や加悦谷地域に多少分布はするものの、規模は小さい。湯舟坂2号墳周辺の湯舟坂古墳群、オヤゲ古墳群、暮石古墳群、九十九塚古墳群



- 1 猫山横穴、2 有明横穴、3 大田鼻横穴、4 左坂横穴、5 里ヶ谷横穴、6 カンジョガキ遺跡、7 大谷西横穴、8 裾谷横穴、9 エノボ横穴、10 丸山横穴、11 彦四郎横穴、12 城の越横穴、13 住地横穴、14 飛谷横穴、15 高尾坂横穴、16 八幡山横穴、17 舟泉寺横穴、18 丸山横穴、19 目谷横穴、20 船山横穴、21 下山横穴、22 脇谷横穴、23 筏ヶ鼻横穴、24 谷内古墳群、25 小林古墳群、26 砥石場西古墳群、27 毘沙門堂古墳群、28 岩穴古墳群、29 石倉古墳群、30 寒ノ院古墳群、31 新戸1号墳、32 西外1号墳、33 桃谷1号墳

図2 中郡盆地の横穴墓と古墳群の分布

で総数30基、与謝野町の高浪1号墳周辺の高浪古墳群、ヤング古墳群で総数25基、同町入谷古墳群で30基、と30基前後から構成される群集墳が最大規模である。隣接地域である舞鶴市大波・奥原古墳群75基、福知山市下山古墳群100基以上に比べると半分以下の規模である。また、唯一群集墳の調査が面的に行われた京丹後市丹後町高山古墳群(総数13基)のように、金銅装の大刀をもつ首長墳が古墳群の中に埋没していることも特徴的である。

なお、横穴墓と群集墳は補完関係にあると言われるが、中郡盆地では、他の地域に比べて横穴墓が多数存在し、それに対して群集墳が少ない様相を示しており、補完関係を

如実に表していると言える。

図2に示した京丹後市峰山町の横穴墓(15~23)は、古くから調査されて知られていたが、大宮町三坂・周枳・口大野の横穴墓(1~9)は、国営農地開発事業に伴い新たに見つかったものである。これら横穴墓の発見は必ずしも容易なものではなかった。

1985・86年に30基の横穴墓が調査された大田鼻横穴については、1961(昭和36)年京都府教育委員会発行の京都府遺跡目録には大宮町三坂大田ノ花に複数の横穴があると記載があり、前述

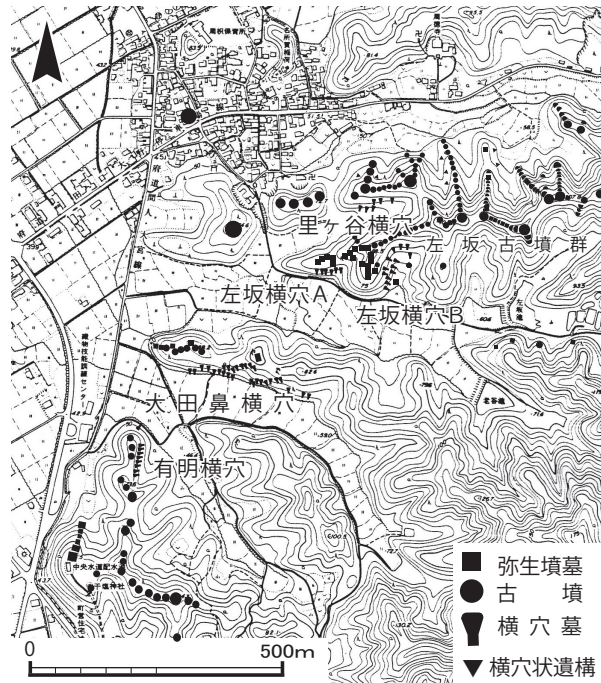


図3 京丹後市大宮町三坂・周枳地区の横穴墓の分布

の下山横穴墓の報告書には、大田花横穴の記載がある。1972(昭和47)年の京都府遺跡地図の大田ノ花横穴の記載には丘陵腹とのみ記されている。1982(昭和57)年度の国営農地開発事業三坂団地の分布調査ではその位置は確認できなかったが、三坂団地の帯城墳墓群の調査の終わった1984年度末に改めて斜面の分布調査をしたところ横穴の可能性のある径10cmの穴が確認され、翌年度の試掘調査につながるようになった。1985年6月に丘陵斜面の表土を除去したところ、19基の横穴墓が見つかった。また、調査中にさらに東側からも11基の横穴墓を検出し翌年度調査するに至った。

大田鼻横穴の南側に位置する有明横穴(1~3号墓)は、1985年度丘陵上の有明古墳群の調査時に、丘陵斜面を検土杖で確認したところ、土質の違いが認められたので丘陵斜面を重機で掘削して検出し、調査されたものである。^(注9) 4~8号墓についても検土杖で確認されており、1992(平成4)年度に大宮町教育委員会により調査が実施された。^(注10) なお、有明横穴の西にはかつて猫山と呼ばれる独立丘陵があり、織物ホール建設にあたり造成中に複数の横穴墓が見つかったことがその後の聞き取り調査でわかっている。^(注11) 左坂横穴A支群では、1990年度に実施した事業着手前の分布調査で、地元で江戸時代まで利用されていたと伝える芋穴(3号横穴)を確認した。その周囲には帯曲輪状の平坦面が観察でき複数の横穴状遺構が存在すると判断したため、1991度に人力で試掘調査を実施したところ、横穴墓の

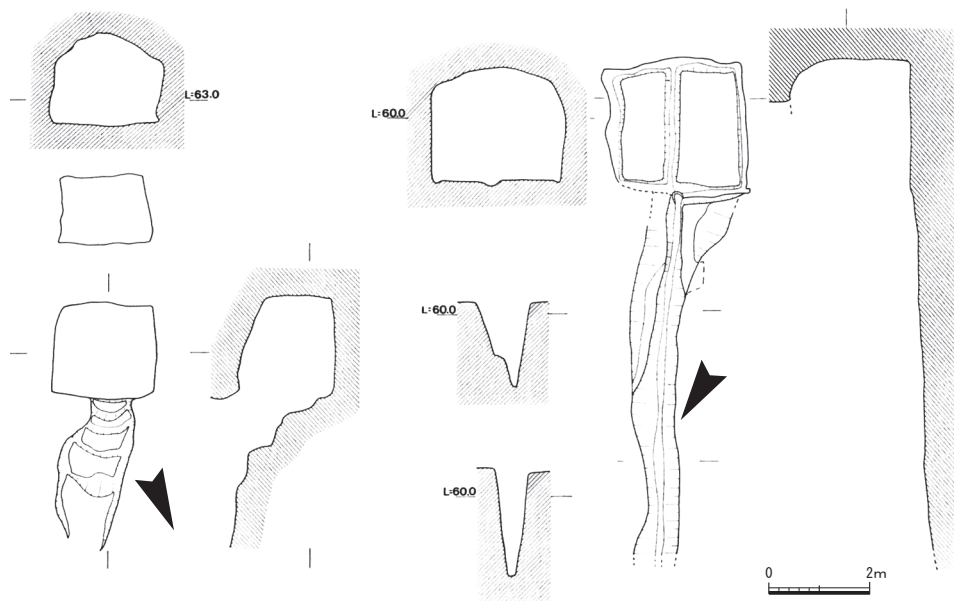


図4 左坂古墳群所在の横穴状遺構

存在を確認し、翌1992年度に発掘調査(4～6号横穴)^(註12)した。近世に利用されていたとされる調査対象地区外に位置する芋穴も横穴墓と判断した。^(註13)左坂横穴A支群の東側の谷部では、分布調査では人工的な地形の凹凸を14か所ほど確認したので、横穴墓が存在している可能性が高いと判断して谷全面を重機掘削して、結果的に13基の横穴墓(左坂横穴B支群)を確認した。^(註14)左坂横穴A支群の北側の谷部では、大田鼻横穴や左坂横穴と同じ南向き斜面を表面観察したところ不自然な凹凸が観察できたので、それらを人力でグリッド調査したところ、表土下1.5mで埋没していた横穴墓を検出し、後の全面調査につながった。^(註15)(里ヶ谷横穴)。2023(令和5)年度に調査されたカンジョガキ遺跡では、対象地全面を重機で表土掘削した結果、7世紀の集落と横穴墓の検出に至っている。^(註16)以上のように横穴墓は、長い年月を経て埋没していることが多く、地表面での観察は困難な状況である。現在の横穴墓の分布状況は、たまたま開発の多かった大宮町域に集中しているのかも知れない。

ところで、左坂古墳群の所在する丘陵の北斜面には、分布調査で7基の横穴状遺構を確認した。この内4基を調査したが、^(註17)階段状の地下式構造をもつもの1基を含め室内は一辺2～3mの方形プランをもち、高さ1.5mを測るものであった(図4)。外見上横穴墓との区別は困難であったが、天井が高くフラットであることと出土遺物は土師器小皿しかないことから、中世の遺構と判断した。同様の遺構は、かつては、横穴墓として知られていた京丹後市峰山町宮谷横穴状遺構や与謝野町三河内古屋敷横穴でも検出されている。^(註18)宮谷横穴状遺構は、人骨とともに中世の土師器皿が出土して、中世に営まれた古墓であると判明

表2 横穴墓の造営時期

		6世紀後半		7世紀			8世紀前半	
9	城ノ越横穴							
11	八幡山横穴							
16	下山横穴							
20	有明横穴							
21	大田鼻横穴							
22	左坂横穴A							
22	左坂横穴B							
23	里ヶ谷横穴							
24	カンジョガキ遺跡(横穴墓)							
25	裾谷遺跡(横穴墓)							
26	エノボ横穴							
29	彦四郎横穴							

した。調査されたのは宮谷横穴として知られていた2基であったが、周囲には同様の横穴があり、最近まで貯蔵庫として利用されていたと報告されている。左坂A4・6号墓でも、平安時代から鎌倉時代にかけて墓として再利用されており、中世においても横穴状の墓が営まれることがあったようだ。

改めて表1を見てみよう。京丹後市弥栄町・峰山町・大宮町の横穴墓と伊根町の小泊横穴墓を除くと、古代の須恵器の出土を伝える横穴墓はない。与謝野町入谷横穴は、人骨が出土しているが、これは宮谷横穴状遺構同様、中世墓と考えることもできる。^(注19)このように考えると、丹後の古代の横穴墓は中郡盆地(竹野川中・上流域)のみに分布することにはならないだろうか。

ちなみに、府内では、八幡から田辺の丘陵にかけて数百の横穴墓が存在することが明らかになっているが、それ以外は、綾部市栗ヶ丘古墳群内に知られる栗ヶ丘横穴及び隣接する小谷横穴、京丹波町三宮校裏山横穴のみである。^(注20)

3. 横穴墓の変遷と築造時期

表2に横穴墓の存続時期を概ねの時間幅で示した。今までの研究の中で、丹後の横穴墓については次の5点が言われている。

①横穴墓の造営の初例は、6世紀末の八幡山横穴墓(TK209古段階)で、横穴式石室が、6世紀前葉(TK 10段階)で導入されているのに比べ大きく時期が下がる。左坂古墳群では、6世紀第3四半期まで丘陵上に木棺直葬の円墳が築かれている。

②横穴墓の玄室の平面形は横穴式石室の平面形を写した6世紀末の両袖式・片袖式・無

袖式の長方形プランをもつもの(Aタイプ)から7世紀の中頃にはフラスコ形(Bタイプ)へ変化すること。

③7世紀代の玄門部の前に長い墓道(羨道)をもつものから、7世紀後半になると複数の横穴で玄門部の前に前庭部(墓前域)を共有するものが増えること。

④被葬者は子どもを含めた複数で、長い場合は、50年以上にわたって継続的に利用されること。

⑤8世紀の前半に、火葬骨が納められるようになり、小型化するとともに8世紀の中頃にはほぼ造墓活動を終了すること。

なお、中村は、装飾大刀の出土や鉄鏃の出土量の差から、横穴式石室をもつ古墳と横穴墓では、被葬者に有意な差があるとしている。しかしながら、横穴墓の造営はTK209の新段階以降の7世紀が主体で、当該期の横穴式石室をもつ古墳は少ない。前段階のTK209段階の首長墓は、副葬品豊かな湯舟坂2号墳、新戸1号墳、桃谷1号墳などが見られ、7世紀前半には、湯舟坂2号墳の周辺には横穴式石室をもつ群集墳が、新戸1号墳と桃谷1号墳の周辺では横穴墓が展開している。この時期の横穴式石室をもつ古墳と横穴墓を較べると被葬者に副葬品の上で有意な差はないと判断できる。

丹後地域での7世紀の横穴式石室の調査例は、京丹後市上野2号墳、同天徳2号墳、与謝野町千原古墳などに限られ、古墳の造営は、7世紀中頃を最後に終焉を迎えたようだ。一方、横穴墓の造墓活動は、7世紀前半から後葉にかけて活発になり、8世紀前半まで続いている。

以下では丹後の横穴墓の玄室外での土器供献、埋葬方法、副葬品などについて、京丹後市大宮町三坂の大田鼻横穴、有明横穴、同町周枳の左坂横穴、里ヶ谷横穴を対象にその実情を確認する。

4. 横穴墓墓道及び前庭部における土器供献

横穴墓の玄室は、閉塞石が用いられることはなく、板戸で閉塞していたことが、玄門部の前に残された溝や段からわかる。横穴式石室の造営が終わった7世紀の中頃以降の横穴墓の墓道や前庭部には、平瓶、横瓶、土師器・須恵器の甕がほぼ壊されていない状況で出土することが目に付く。これらは、玄室内に供献された土器類と違い、閉塞部外側での墓前供養に用いられたものと考えられる。墓道・前庭部は流出したり、壊されたことにより失われていることが多く、どの程度の割合で実施されたかわからないが、以下遺存状態の良い例を見てみよう。

①左坂横穴A支群4号横穴(図5)

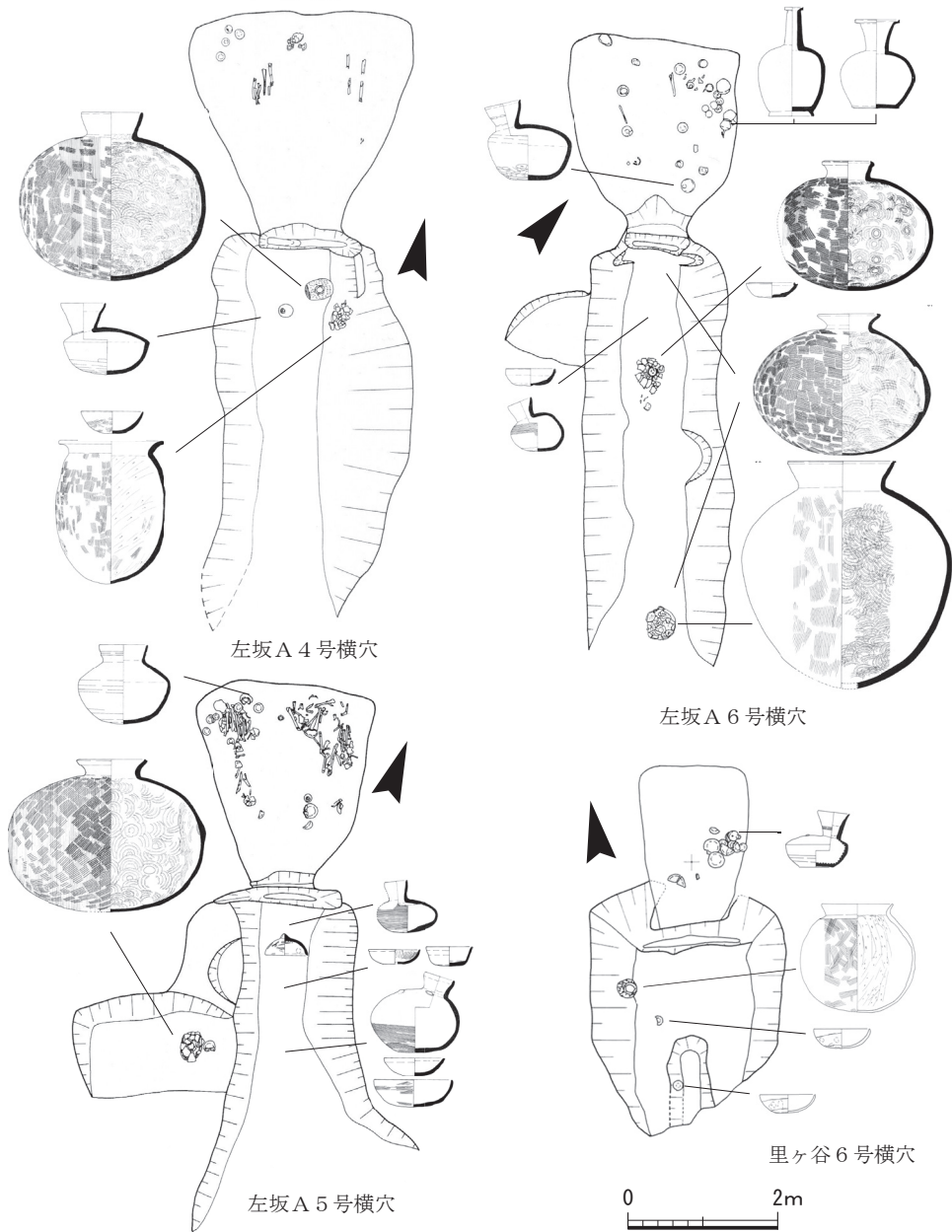


図5 左坂横穴A支群と里ヶ谷横穴での土器供献(玄室内の小形器種は除く)

全長8.3m、玄室長3.0m、玄室最大幅3.2m、墓道長5.3mを測る横穴墓である。玄室内には、かたづけられた状態で3体以上人骨が確認されており、7世紀後葉の土師器碗と須恵器が出土している。玄門部の手前から、墓道がある程度埋まった時期に供献された土師器碗と甕、須恵器平瓶と横瓶が出土している。

②左坂横穴A支群5号横穴(図5)

全長7.2m、玄室長2.8m、玄室幅2.4m、玄室天井高1.1m、墓道長4.4mを測る横穴墓である。天井が良く残っており、未盗掘が明らかである。玄室内には、かたづけられた状態の9体もしくは10体の人骨と7世紀後葉から8世紀初頭の須恵器杯・椀・高杯・壺と土師器の椀・杯・皿・蓋計17点及び刀子6点が出土した。玄門部手前の墓道からは、埋土中層の腐植土混じりの黒色土内から土師器椀・杯と須恵器杯・平瓶が、墓道横に設けられた平坦面から横瓶が出土している。

③左坂横穴A支群6号横穴(図5)

全長8.2m、玄室長2.7m、玄室幅3.2m、羨道長5.5mを測る横穴墓である。10世紀に墓として再利用されており、床面から8cmほど上層の面で土師器と人骨、あわびが出土している。玄室床面からは7世紀中葉から第3四半期の土師器の椀・甕と須恵器の蓋杯(杯G)と杯・壺・平瓶が出土した。杯Gは4セット、甕は小形の2点である。墓道床面からは7世紀中葉の須恵器杯身と横瓶が、墓道中層からは7世紀中葉から7世紀後葉の須恵器椀・横瓶・甕が出土している。

④里ヶ谷6号横穴(図5)

全長4.9m、玄室長1.9m、玄室幅1.4m、墓道長2.4mを測る横穴墓である。玄室床面から7世紀末葉の土師器の杯・皿・台付皿・平瓶と須恵器杯が、墓道(前庭部)中層から土師器甕と土師器椀が出土している。

⑤大田鼻10・11号横穴(図6)

10号横穴と11号横穴は前庭部を共有する。10号横穴は玄室長2.3m、玄室幅1.9mを、11号横穴は玄室長2.4m、玄室幅2.4mを測る。共有する前庭部は現存長1.9m、幅3.3mを測る。10号横穴の玄室内には土師器細片と骨片が散乱していた。11号横穴の玄室内には焼骨が散乱しており、8世紀前葉の土師器椀が出土した。前庭部からは、床面と床面から20cm上方の2面から8世紀前葉の遺物が出土した。床面では、10号横穴の右前面から横瓶が、10号横穴と11号横穴の玄門部の間からは須恵器長頸壺2点と横瓶が、11号横穴の左前面からは平瓶が出土した。床面から20cm上方では、10号横穴の右前面から土師器椀と甕が、11号横穴の左前面から土師器甕と須恵器長頸壺が出土した。

⑥大田鼻17・18号横穴(図6)

17号横穴と18号横穴は前庭部を共有する。17号横穴は玄室長3.2m、玄室幅2.9mを、18号横穴は玄室長3.2m、玄室幅3.1mを測る。短い墓道に続く前庭部は長さ4m、幅4mを測る。玄室内の人骨は少量で、成人1体が確認されている。玄室内からは7世紀末から8世紀前葉の多数の須恵器・土師器と鉄刀の鏝と鉄鏃6点が出土している。玄門部から入っ

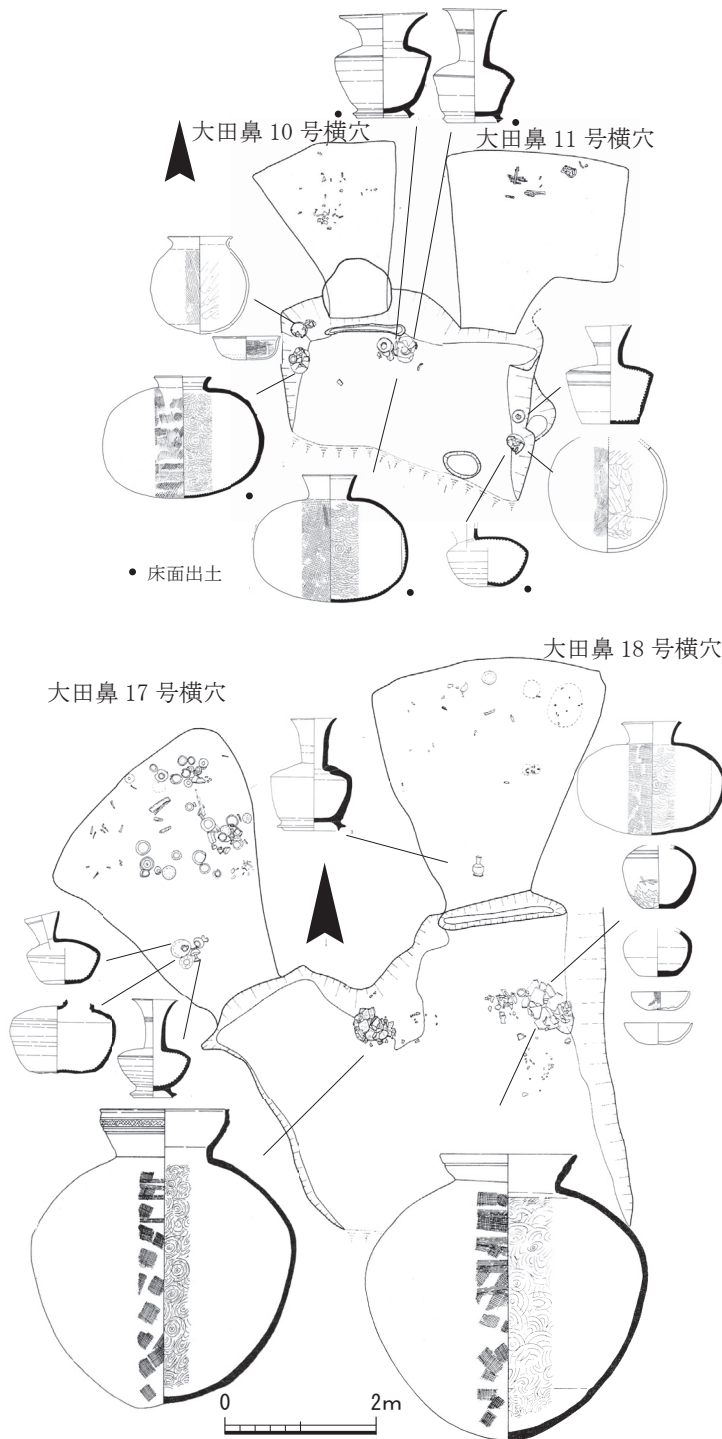


図6 大田鼻横穴での土器供献(玄室内の小形器種は除く)

てすぐの左側から須恵器壺・平瓶2と土師器椀が、玄室中央部から奥壁にかけて須恵器蓋7点・杯身8点と土師器杯2点・椀7点・皿3点・台付皿5点が出土した。玄門部手前の18号墓との境界近くには須恵器大甕が据えられていた。18号墓の玄室内にも玄門部から入ったところに壺が置かれていた。玄室内の人骨は遺存状況が悪く2体確認されている。玄室内の遺物は少なく8世紀前葉の須恵器杯と土師器杯のみである。18号墓の前庭部からは、土師器椀2、須恵器壺2、須恵器横瓶及び須恵器大甕が出土した。

⑦左坂横穴B支群
1・2号墓(図7)

前庭部を共有する火葬骨を埋葬した小形の横穴墓である。

1号横穴は玄室長

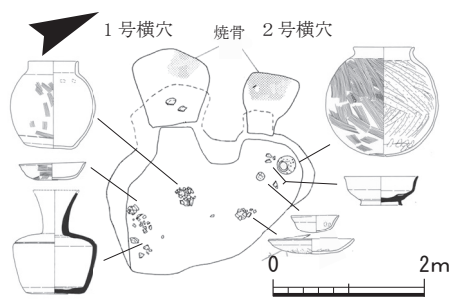


図7 左坂横穴B支群での土器供献
(玄室内の小形器種は除く)

1.0m、玄室幅1.0mを測る。玄室の床面積は1㎡に満たない。玄室奥から焼骨が出土したほか、玄室内から8世紀前葉の土師器杯1点が出土した。2号横穴は、1号横穴よりさらに小さく玄室長0.8m、玄室幅0.7mを測り、床面積は0.4㎡ほどである。玄室奥から焼骨が出土したほかには、鉄鎌の茎が出土したのみである。

1・2号横穴の前庭部は、歪なコの字型で、長さ1.5m、幅2.5mを測る。供献土器は床面から20cmほど浮いた位置から出土した須恵器の稜椀以外はいずれも床面から出土している。1号横穴の前面には、土師器壺、杯と須恵器壺が出土した。2号横穴の前面からは土師器椀・皿と土師器甕が出土している。

5. 埋葬状況

横穴墓内でどのように埋葬されたかについては、人骨の遺存状況がさまざまで、よくわからないのが現状であるが、人骨が良好な状態で出土した事例(図8)を確認したい。なお、いずれの人骨もかたづけられた状態で出土している。

大田鼻2号横穴では、成人5人(男性・女性各2、不明1)と未成人5人の計10人の人骨が確認された。人骨は、玄室奥壁に向かって右側にかたづけられた状態で出土している。供献土器の多くは人骨とともにかたづけられているが、最初に供献された位置(以下原位置と表記)をとどめていると考えられるものもある。玄室内の土器は7世紀前半である。

大田鼻6号横穴では、成人6人(男性3、女性2、不明1)と未成人1人の計7人の人骨が確認されている。2号横穴同様、人骨は奥壁に向かって右側にかたづけられている。土

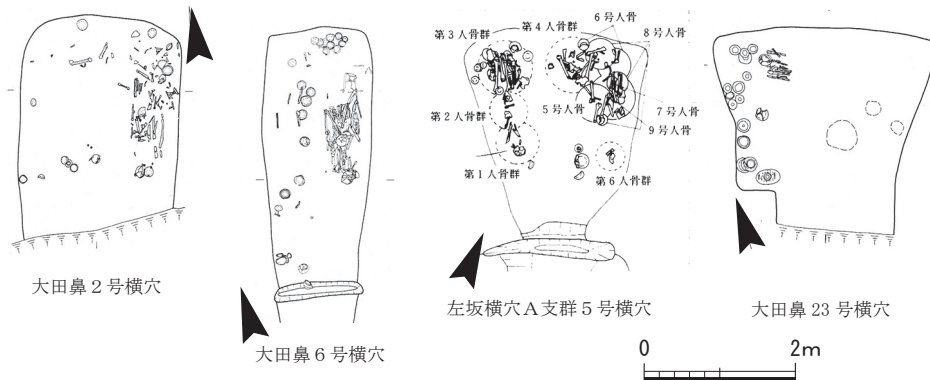


図8 人骨の出土状況

器は人骨とは別に奥壁壁際に集積されているほか、玄室内左側からも原位置を保った状態で出土している。7世紀前葉から中葉の土器が出土している。

左坂横穴A支群5号横穴は、玄室内の高さ1.0mの低い天井部がほぼ完存しており、土砂の流入もなく、検出状況はほぼ埋葬時の状況を示しているものと判断できた。玄室入り口から中央部にかけては、人骨・遺物ともなく、あたかも次の埋葬のために空間を開けているような状況であった。9体以上の人骨が確認され、不明な点もあるが成人7人(男性4、女性2、不明1)と未成人2人の存在がわかる。これらは、一体ずつかたづけられたかのように各人骨がまとまって出土している。ただし、人骨の遺存状況が良いにもかかわらず、頭蓋骨がなかったり、上腕骨が片方しかないものや、左大腿骨のみ残存する人骨があり、再埋葬の可能性も考えられる。供献土器の多くは、奥壁近くに集められていた。7世紀後葉から8世紀初頭までの土器が出土しており、およそ50～60年間にわたって営まれたと考えられる。

大田鼻23号横穴では奥壁に向かって左側奥の1か所に集められていたほか玄室内3か所から人骨が出土している。奥壁近くに置かれていたのは、成人女性1体の人骨で、それ以外に成人1人と未成人2人の焼骨が出土している。実測図に記された玄室内右側の3か所の人骨集積がそれぞれの焼骨に対応するとすれば、女性の人骨を奥壁にかたづけたのち、空地であった玄室右半部に3体の焼骨をそれぞれ配置したのであろうか。

6. 副葬品

京丹後市大宮町三坂・周枳の4つの横穴墓群は造墓活動が7世紀から始まったこともあり、副葬品は少ないが、61の横穴墓のうち、25の横穴墓から副葬品が出土している(表3)。武人的な性格を示す剣や刀が出土した横穴墓は、それぞれ1基で、鉄鏃が出土した横穴墓が7基である。最も多く出土したのは刀子で17基の横穴墓から計42点出土している。特に、大田鼻2号横穴、大田鼻24号横穴、左坂A5号横穴など多数の死者が埋葬された横穴墓からそれぞれ、5点、2点、5点など多数の刀子が出土する傾向にある。金銅製の耳環は、11の横穴から24点が出土している。このうち6基の横穴からは1点のみの出土であり、1対で1セットとして利用されたわけではないようである。翡翠や瑪瑙の勾玉や水晶製切子玉を副葬する横穴も3基ある。

横穴墓の営まれた7世紀前半に築造された横穴式石室を埋葬主体とする古墳に、与謝野町千原所在の千原2号墳^(注21)と京丹後市丹後町三宅所在の上野2号墳^(注22)がある。いずれも二重の列石をもつ方墳で、千原2号墳からは金銅装の帯金具が、上野2号墳からは鉄鏃7、刀子5、耳環1が出土している。

表3 副葬品をもつ横穴墓一覧

	遺跡名	被葬者数	副葬品	埋葬時期
1	有明3号横穴	不明	刀子、鉄鏝?	7世紀第2四半期
2	有明5号横穴	4～5人以上	刀子、勾玉2 (翡翠、瑪瑙)、水晶製切子玉	7世紀後半
3	大田鼻2号横穴	10人以上	鉄鏝2、刀子7、耳環7	7世紀第1四半期
4	大田鼻3号横穴	不明	刀子、釘、絞め金具、水晶製切子玉	7世紀第1四半期～第4四半期
5	大田鼻4号横穴	不明	刀、刀子4	7世紀
6	大田鼻6号横穴	7人以上	鉄鏝5、刀子2、耳環	7世紀前半
7	大田鼻7号横穴	不明	刀子	7世紀
8	大田鼻9号横穴	不明	耳環2	7世紀
9	大田鼻16号横穴	1人以上	刀子	8世紀第1四半期
10	大田鼻17号横穴	1人以上	刀	7世紀第4四半期～8世紀第1四半期
11	大田鼻19号横穴	2人以上	刀子2	7世紀後半
12	大田鼻20号横穴	不明	耳環5	7世紀第1四半期
13	大田鼻24号横穴	2人以上	刀子4、耳環、釘	8世紀第1四半期
14	大田鼻25号横穴	不明	耳環	8世紀第1四半期
15	大田鼻27号横穴	不明	耳環	7世紀第3四半期
16	大田鼻28号横穴	不明	鉄鏝2	8世紀前半
17	左坂A3号横穴	不明	刀子	7世紀
18	左坂A4号横穴	3人以上	短剣、鑿	7世紀後葉
19	左坂A5号横穴	9～10人	刀子6	7世紀後葉～8世紀初頭
20	左坂A6号横穴	不明	刀子5、耳環2	7世紀中葉～後葉
21	左坂B2号横穴	1人以上、焼骨	鉄鏝	8世紀前葉
22	左坂B4号横穴	2人以上	鉄鏝2、刀子、鉄鏝、耳環	7世紀後葉
23	里ヶ谷3号横穴	2人以上	刀子3、針?、耳環2	7世紀後葉
24	里ヶ谷4号横穴	1人以上	鉄鏝、耳環	7世紀前半
25	里ヶ谷5号横穴	1人以上	刀子2	7世紀前半

7、おわりに

丹後地域の中郡盆地を中心に分布する横穴墓について、分布と造営時期、墓道・墓前域での土器供献、埋葬状況、副葬品について概観してきた。あらためて、ここでその状況を取りまとめておく。

①従来から中郡盆地を中心に広く熊野郡、与謝郡まで丹後の横穴墓は分布すると考えられてきたが、中郡盆地周辺に限定される可能性が高い。加えて、中郡盆地では現状では6世紀後半に首長墓と言える横穴式石室は営まれるものの、それに続く群集墳は存在しない。

②横穴墓の造営は6世紀末から始まり、7世紀に隆盛し、8世紀前半まで続く。

③玄室内でも須恵器と土師器の椀・杯・皿・壺による死者への食物供献は行われているが、玄門部の外側では、須恵器横瓶・平瓶・長頸壺・甕及び土師器甕による墓前供養が盛んに行われていること。土器が正置された状態での出土状況から、追葬が繰り返される中、被葬者全体の祖先供養を行うような行為が繰り返し行われていることが予想される。

④被葬者は複数の男女の成人と未成人(子ども)であり、多い時には10人以上に及ぶこと。人骨は、いずれも玄室の奥へかたづけられた状況で出土しており、遺体の腐敗が進んだ段階で玄室の奥にかたづける行為が繰り返されたのか、人骨に不足分があることから、死後しばらく違う場所に安置(埋葬を含む)していた遺体(人骨)を再埋葬したことが考えられる。火葬の風習がいち早く始まった後も納骨施設として利用されている。^(注23)

⑤副葬品は、同時期の首長墓に比べるとやや少ないが、7世紀前半の鉄鏃、刀子、耳環の副葬は他地域の群集墳も含めた当該期の古墳の副葬品の構成・量とも大差ない。特に刀子の供献が目立つことに加え、畿内系の土師器椀・杯が供献されていること、有明横穴・大田鼻横穴に墨書土器が見られることなどから識字層が埋葬されていたことが予想される。^(注24)

以上の状況から推測される横穴の被葬者層は、中郡盆地で群集墳の造営に代わって横穴墓を営んだ人びとで、畿内との関係も深い仏教思想を早くに取り入れた官人層であることが予想される。

丹後の横穴墓の造営は、かつては、丹波の中心であった丹後が、713年に丹波から分国され丹波の盟主としての位置を名実ともに失うこととも関わると思われるが、その検証については、今後の課題としたい。

本稿の執筆にあたり、学生時代に大田鼻横穴の調査に精力的に取り組みその後も丹後の後期古墳の調査研究に尽力された長く親交のあった森正さん(令和5年逝去)を追悼する。

(ひご・ひろゆき = 当調査研究センター調査課課長補佐)

- 注1 松本庄三郎1899「丹後に於ける横穴の発見」『東京人類学雑誌』第159号
- 注2 田中光浩1981『下山横穴墓発掘調査報告書』(京都府峰山町文化財調査報告第7集)峰山町教育委員会
- 注3 岡田晃治、羽淵賢良、細川康晴、森正1987「3 国営農地開発事業関係遺跡昭和61年度発掘調査概要〔2〕大田鼻横穴群」『埋蔵文化財発掘調査調査概報(1987)』京都府教育委員会
- 注4 岡田晃治1989「大田鼻横穴群の再検討」『史想』第22号 京都教育大学考古学研究会
- 注5 森 正1996「丹後地域の横穴墓の変質と終焉—律令期支配の一側面」『京都府埋蔵文化財論集』第3集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注6 岡林峰夫1999「丹後の横穴」『太邇波考古』第12号 両丹考古学研究会
- 注7 渡邊邦雄2004「墓前祭祀から見た丹後地域の横穴墓」『古代文化』56巻第2号 古代学協会
- 注8 中村彰伸2018「丹後における横穴墓の立地とその階層性」『舞鶴・今日丹後地域の文化遺産』(京都府立大学文化遺産叢書 第14集)京都府立大学文学部歴史学科
- 注9 増田孝彦1987「国営農地開発事業丹後東部地区関係遺跡(1)有明古墳群・横穴群」『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注10 今田昇一ほか1998『三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群』(京都府大宮町文化財調査報告第14集)大宮町教育委員会
- 注11 大宮町教育委員会1999『大宮町遺跡地図』(大宮町文化財調査報告第17集)
- 注12 肥後弘幸1992「国営農地開発事業関係遺跡平成3年度発掘調査概要〔8〕左坂遺跡・左坂横穴」『埋蔵文化財発掘調査概報(1992)』京都府教育委員会、肥後弘幸1993「国営農地開発事業関係遺跡平成4年度発掘調査概要〔2〕左坂横穴」『埋蔵文化財発掘調査概報(1993)』京都府

教育委員会

- 注13 その後、工事対象地に入る入ることがわかり調査。竹原一彦ほか1996「国営農地(丹後東部地区・西部地区)開発事業関係遺跡平成7年度発掘調査概要(3)左坂墳墓群・左坂古墳群・左坂横穴群」『京都府遺跡調査概報』第71冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注14 筒井崇史1994「国営農地(丹後東部地区・西部地区)開発事業関係遺跡平成5年度発掘調査概要(2)左坂横穴群(B支群)」『京都府遺跡調査概報』第60冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注15 注9と同じ。石崎善久1993「国営農地(丹後東部地区・西部地区)開発事業関係遺跡昭和63年度、平成3・4年度発掘調査概要(2)里ヶ谷横穴群」『京都府遺跡調査概報』第55冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注16 増田孝彦2024「令和5年度はくつちょうさ略報19.カンジョガキ遺跡第4次」『京都府埋蔵文化財情報』第147号(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注17 肥後弘幸1991「国営農地開発事業関係遺跡平成2年度発掘調査概要〔2〕左坂古墳群」『埋蔵文化財発掘調査概報(1992)』京都府教育委員会。他の3基は、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターの調査により近世の貯蔵穴と報告されている。
- 注18 峰山町教育委員会1986『宮谷横穴状遺構発掘調査概要』
- 注19 横穴墓以外にも横穴式石室なども中世墓として利用する事例が、与謝野町高浪古墳で確認されている。
- 注20 三宮校裏山横穴は、出土遺物の報告がない。周辺では古墳が確認されていないことから古代の横穴墓である可能性は低い。
- 注21 岡田晃治、絹見安明、肥後弘幸ほか1984『千原古墳・弓木城跡』(京都府岩滝町文化財調査報告第6集)
- 注22 河野一隆1995「上野古墳群・滝谷遺跡発掘調査概要(1)上野古墳群」『京都府遺跡調査概報』第66冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注23 7世紀後半から8世紀前葉に営まれた豊岡市日撫・正福寺谷横穴墓群9号横穴からも火葬骨が出土している。豊岡市教育委員会1987『日撫・正福寺谷横穴墓群』(豊岡市文化財調査報告書16)
- 注24 大田鼻横穴からは「厨」「厨物」「厨人」が、有明横穴からは「奉」の墨書土器が出土しているほか京丹後市弥栄町城の越横穴からも墨書土器が出土している。